

幼児期の情意教育に就て (二)

大塚 喜 一

第二章 兒童の模倣と徳育

「學ぶ」は「まねる」より轉化せる語なりといふ如く、兒童の模倣が教育上殊に幼時期に於て大切なるは明である。然れども兒童の模倣を智育方面より研究せる書の多さに比し、之を情意育の方面より考察し、殊に最も肝要なる兒童の徳育方面に論及して實際家の指針となるべき著述・學說等を發表せるものは、淺學なる小生の之を見出し難き所である。此間にありて、福島政雄先生著「實踐教育上より見たる兒童の模倣」なる書は、其序文の一節に於て「余は人格と人格との接觸感應を社會の理法に尋ね、之を兒童の模倣性の發達に探つて遂に人格感化の秘奥の一路に入り、之を此著に闡明せしむ事を努む」と云はれて居る通り、筆を日常何人も見聞する平凡にして屢々起る兒童生活に起して次第に人格の高峰に向ふ情意育の過程に分け入り、遂に「知行合一」の理想境に迄突進み、人の一生を支配する確固たる性格を其兒童期の無意識的の暗示模倣の中に形成し陶冶すべきを述べられたるは吾人の最も意を得たる所である。以下述ぶる所は主として本書を參考とし、其拔萃を編者の考にて纏めたるものである。

著者は先づ第一章「模倣と教育」に於て、「本書に於ては人と人との間に行はるゝ暗示によりて人の行動を模倣する事を主として研究せんとす。『無爲にして化す』といふ事が實踐躬行の模倣の重要な方面である。」と述べ、第二章「模倣と身體及精神」に於て、身體の有機的組織の同一といふ事及先天性としての模倣欲動の存する事の爲めに模倣が行はれるのであると説き、次に模倣が發達する爲の必要條件として

一、腦髓殊に大腦皮質の可塑性(本誌前號參照)

二、記憶と習慣

(習慣は特別な事情の下に本能と固く結合す)

を擧げてゐる。是等を基としての兒童の發達の各時期に於ける模倣を考察し其教育的意義を闡明するのである。

扱て、兒童の年齢の幼き程其受くる影響感化の深さを思へば、嬰兒が最初に示す反射的模倣は實に教育上深甚の意義を有するものである。教育者たる事を自覺せると否とに拘らず、嬰兒に日常接する父母、親近者の性格の特徴を表示する身振動作表情等は、幾度も繰返して嬰兒に反射的に模倣せらるゝが故に漸次その年齢の進むにつれ日に月に多かれ少かれ永久的なる一定の影響の痕跡を兒童に與ふ。かくして

兒童の習慣や性格が固められて行くのである。

此事は精神分析の方より見れば極めて興味深き問題である。ヒングレー原著、寮佐吉氏譯「精神分析學」(一七一——一七二頁)によれば

「發達しつつある子供の性格上に陶冶的影響を及すものは、兩親間の隠されたる不和、秘密なる苦惱、抑壓されたる願望等にして、是等は遅々たれども確實に、無意識的であるが根據深く子供に植え付けられ、從て子供は外界に對して同様なる反應を爲す様になる。何となれば、是等の下意識的情緒は其個人に外面的の表徴を有する或る感受状態を作らせるから、これが子供によりて反射的に模倣せられて子供の心の中へ同様なる状態が作られるのである。マクドールも云へるが如く、情緒は身振りが模倣せらるゝ以前に交感的に感應せらる。」と。

「模倣は暗示の結果である。」事を思へば此事は當然である。

兩親の下意識的生活(我知らず爲す行動云爲)が斯く最初期の印象を支配するを思へば、眞に「自然」の道に副はむとする教育は實に其親たらむとする人の教育より初められねばならぬ。何となれば、かかる下意識生活の統制は、既に年長じて大人となる親にとりては今更極めて困難なる事であり、清く柔かなる嬰兒の心に己が醜き心の奥底迄も印象されてゆくを恐れつゝ、自己の修養の遅々として進み難きを歎ぜざるを得ないからである。私が本文第一章の始に於て「妊娠前より自己の日常生活を統制し

以て神聖なる天使の産れ来るを待たねばならぬ」と述べたるは即ち斯かる知らず識らずの中の感化影響を恐懼するからである。斯く考へ來れば、今より數年の後親となるべき處女が純真健實なる生活をなす事は、次代の國民教育上より見て最も力強き皇國の礎である。倉橋教授は「家庭教育とは家庭生活そのもの、有する教育効果を實現する事である」と云はれ、羽仁女史は「親の生活は即ち子供の教育なり」と云はれた。

子供が少しく長じて滿一歳内至三歳頃となれば、特に人に對する被暗示性を著しく發現し來り、特に人を模倣せんとする。著者は此時期を「人格の模倣の萌芽期」と名付け、又一名之を「模倣全盛期」として其教育的意義を論じてゐる。

此時期の第一特徴は、嬰兒は母親や乳母の如く常に自分が取扱はれてゐる人から抱かれる事や其人に取扱はるる事に快感を覚え、其他の人に取扱はるゝ事に不快を感じて泣き叫ぶ事である。此辨別の感は驚くばかり鋭敏である。而して其理由は、母親や乳母が子供を扱ふ方法が不知不識の間に其人格を暗示する爲であらうと解せらる。斯の如くにして一度母親や乳母の特質を感じすれば、それが嬰兒の一般感に於ける一種の習慣となる。此習慣が嬰兒を吸引する力は實に其快苦の感をも超越する程である。これは全く嬰兒が習慣的に母親や乳母の特質とよく順應してゐるが爲であつて、かゝる感覺の習慣が心身發育上に至大の影響を及ぼす事は、發生的見地より心身相關の微妙の理に思ひ到らば其然るべき所以を

知るであらう。

次に此時期の模倣はカークバトリック氏の云ふ「自發的模倣」に當る。氏の所説 (Kirkpatrick, — Fundamentals of Child Study p. 164) によれば「自發的模倣の價值は、模倣されたる事物が智識の形又は運動の能力として蓄積せられ、それが使用せられ、分析せられ結合せられ、斯くして將來或目的の行動に役立つ所に存する。子供は音響又は運動を其見聞したるまゝに知らんとするのみならず、又自ら之を發聲し遂行したる時に感じたる如く習得せんとするものであるから、斯の如くにして得られたる知識又は經驗は客觀的であると共に主觀的である。子供は之に依て世界の萬物と親しき心の關係を結び、外界を内界に取入れる様になる。而して斯かる智識は其基礎も固く深く子供の性格に根を下さんとするものである。」

斯の如き傾向は、幼兒の徳育上重要な教育的任務を吾人に課するものである。子供は身自ら他人の動作を模倣して實行するのであるから、自分の心の内部から切實に動作を感じるのである。子供は生之初に於て既に吾人を模倣して動作する。人格の模倣の萌芽期に於て、人の動作を模倣する事によりて人と人との關係に關する實踐的知識を得るものである。しかも斯の如き模倣は、子供が其意味を知り盡してから模倣するのでなく、其意味を知るに先つて動作は既に幾度か模倣せられたる結果として子供に一通り固まつた習慣となつてゐる場合が多いのである。而して此習慣は幼兒が其日々の家庭生活に於て父

母の愛育の裡に徐々に形成され、漸て彼の一生を支配すべき決定的性格に迄固まり行くのであるから、幼児教育の徳育方面は實に父母及他の家族員（雇人、出入の人等をも含む）が子供の旺盛なる模倣殊に自發的模倣を善用して善良なる習慣を養成する事に存する。

子供が更に長じて滿三四才より九才頃迄は、想像作用の最も活潑に働く時期である。カークパトリック氏は、子供が想像を盛に働かせて戯曲的に人の爲る事を模倣する時期を四才より七才迄の間としてゐる。かゝる想像的遊戯は、個性と環境との相違によりて種々異なる態を具へるが、之を通觀すれば人生の模倣といふ點に於て共通性を有するのである。子供が人形又は一本の棒を生きた人間としたり木の枕を家としたり等する想像作用はそれ等の人や物に纏綿した感情に依るのである。而して斯かる遊戯に用ふる事物に對する時、子供の心には實際の人や物に對する時と變らぬ感情——寧ろそれ以上の強い感情が湧くのである。遊戯する子供は、單に眼前の事物を變化したと想像する事に云ひ知れぬ満足を感じるものであつて、實際の變化は却て好まぬのである。即ち此際の事物の想像的變化は子供の情性に満足を與ふるものである。されば、此時期は感情陶冶の最も大切なる時期であつて、此眞剣なる無邪氣なる幼児の感情生活の環境として家庭は最良の教育所とならねばならぬ。

次に、人生の模倣たる遊戯の教育的意義は、ゲロース氏 (Karl Groos) によれば、遺傳的の反應が生

長期に於て著しく現はるゝ「動作を渴望する心」の助を受けて自ら活動し、之に依て新經驗獲得の素地を作り、斯くして遺傳的基礎の上に新しい反應の習慣を建設する所に存する。殊に生具的なる模倣^{●●●●}慾^{●●●●}動^{●●●●}は此新經驗獲得の道行をして成人の習慣や能力に副はしめ、子供自身の主觀に於ては活動それ自身を樂しむ遊戯は、之を客觀的に一生涯を通じて見れば、其兒の將來の生活に對する最も適切なる準備となつてゐる譯である。(凡そそれ自身生活^{●●}たらざれば他の時期の準備たり得ず)

幼兒にありては想像の世界と現實の世界とは極めて近接したるものであるから、親子兄弟等の關係を寫し出せる模倣遊嬉は即ち直に孝悌の徳の實行である。斯かる遊戯の中に及日常生活の行動云爲の間に實行によつて種々の感情は子供の切實なる經驗として子供の腦裏に習慣性として蓄積せらる。其過程が無意無心の間に行はるゝに至れば、暗示模倣の微妙の感化は幼兒の下意識に迄浸潤し行くのである。

次に、著者は更に發達の段階を追ふて意志的模倣に就て述べてゐる。これは前の想像期の終頃に漸く形成され其後年を追ふて徐々に成熟するもので、兒童が示されたる模範と自己の之を模倣する行爲との差違を意識して模範に一致せんと努力するを云ふのである。モイマン氏の實驗的研究によれば、兒童が意志的模倣を爲す時期に至つても尙暗示感受性は相當働くが、其度は七才から十五歳迄次第に減じ、反對に暗示に對して抵抗する力が増す様がわかつた。

されば、被暗示性に富む幼時期に於て、徳育上善良なる模範を示して其意志活動に一定の習慣を馴致する様に努むれば、漸て年長じて被暗示性を滅じ暗示に對する抵抗力が増すに至れば、兒童は既に獲得したる意志の習慣に依り、不良の暗示も排除して自己確立の第一歩に入る事が出来る。殊に無意無心の暗示模倣の薫育が兒童の下意識に迄徹底するを得れば、兒童をして後年求めずして自ら善に就き惡を去るの良習を確保せしめ得べく、斯くして「心の欲する所に従つて法を矩えず」てふ理想境に近づくを得るであらう。

以上は發達の順序に従つて述べたのであるが、次に稍見方を變へ、主として徳育に關係深き情意相關の陶冶過定に就て述べやう。

凡そ感情は人生に於て大なる力を有するものであるが、吾人が特に注目せんとするは意志の動機としての感情の力である。感情の性質上經過的であつて生滅常なきは其一面の相であるが、しかも一人の生命ある人格に就て見れば感情の發動には一定の傾向が存する、即ち感情發動の個人的差違並に感情に附屬した個々人の習慣があつて、是等の傾向は人より人へ暗示により不知不識に傳はるものであるから、茲に感情陶冶が可能となるのである。其有様は前に子供の模倣の發達の順序に従て其教育的意義を述べたる所々にて略々察せらるゝ事と思ふが、茲に注意したきは感情と直觀との密接不離の關係である。感

情は必ず或直觀に伴ひて起るものであり、直觀は感情を湧起して外界の事物を内部の精神生活に觸れしむるものであるが、徳育上大切なるは人生に於ける道德的行爲の直觀である。直觀によつて惹起された情操をして意志活動の動機に於て最も有力なる支配者たらしめ、性格發動力たらしむる程深く精神生活に入りしむる手段こそは模倣に外ならない。暗示模倣に依て行ふ行爲即之である。兒童が直觀した徳行を暗示模倣の働に依て實踐躬行する時、徳育上の直觀の意義は全うせられるのである。直觀に依て兒童の道德的情操が鼓吹せられて奥深く兒童の精神生活に觸れ、兒童は茲に直觀の暗示に依つて一定の力を精神内(上として下意識界)に受容すれば、此力は其後機會ある毎に兒童の動作に發現して、兒童は殆ど無意無識の間にでも其直觀した行の模倣を反復する。是、實行の習慣の第一階様であつて、之に依て道德的情操は兒童の性格の一部として其精神生活内に織込まれ將來の行爲を支配するに至る。

次に、斯の如き直觀に伴ふ感情は、兒童が悪習慣を去りて善習慣に移らむとする動機となるものである。たとひ兒童の悪習慣の根が堅いにもせよ、苟も教育者と兒童とを繼ぐ信と愛との絆が永遠に固く常住不變なりせば、一日一日と其間に行はるゝ直觀暗示の力はいつとはなしに兒童の心の奥に浸み込みて其中何時か意識に觸れて兒童の精神生活を覺醒すべき潛勢力である。人格の光の暖か味を受け目に見えぬ浸潤の力を暗々裡に受容した彼が、一度肅然として希望の大空を仰ぎ、一度翻然として過去の非を悟る時、茲に躍如たる道徳的情操が喚起せられて彼は奮然蕨起して自ら悪習慣打破の第一程を實行するで

あらう。一步は百歩の初である。一度悪習に打勝ちて意志の勝利てふ自己衷心の愉悅を實感するなれば、其後は度重る毎に加速度間に其行爲を容易にし遂に全く悪習を根絶して良習を確保するを得るであらう。

實行の習慣の陶冶の理想は知行合一の人を作るにある。此知と行との間の關係を結ぶものは前述の道徳的情操である。實に一の善言を聞き一の善行を見ては、必ず之を自家の模範として取入れ、機に應じて自然に之を實行に現す様な人格を作る事が徳育訓練の目的であり又教育の目的である。たとひ斯な様理想の境には達せずとも、兒童期に於て陶冶せられたる實行の習慣が確實なれば確實なる程、成長の後人生に處して知行合一を得る事が容易となるであらう。

